

文である。その内容は、令義解抄本、類聚三代格抄本、類聚符宣抄々本、大學式、山家學生式、綜藝種智院式並序、清行朝臣意見十二箇條抄、日本書紀抄、續日本紀抄、日本後紀抄、續日本後紀抄、文德實錄抄で、固より王朝教育史資料の全部ではないが、教育史を修める學生が古書を読む演習用として恰好のものである。(菊版九一頁 東京長崎書店發行、價壹圓)(以上松野)

●蒙古史研究

箭内 互著

故箭内博士の數々の業績が、博士の高弟たる岩井、石田、和田三學士の甚大なる努力によつて千二百頁の彪大なる「蒙古史研究」になつて先般上梓され、吾人の机上を飾る事になつたのは、實に近年に於ける塞外史研究上の大收獲の一と云はねばならぬ。今他國の事は措いて問はず我國に於ける眞の蒙古史—元史研究の由來を尋ねるに、之は決して古いものでなく、大體に於て明治後期に其端を發する。前清翰林學士文芸閣先生が我邦に來遊されたのは明治三十二年の事にして、かの蒙文元朝祕史を我に傳へられたのは三十四年暮の事であつた。これが抑々

我國に於ける蒙古史研究をして大發展せしむる緒となるものであつて、遂に明治四十年初頭故那珂博士の名著「成吉思汗實錄」の出るに至つて果して新しい飛躍がみらるるに至つたのである。故那珂博士の勞業は其以前にも有つたが、右實錄の出現が蒙古史研究に對して一轉機を與ふる事になつて此に新しい研究時代が作り出された事は否まれぬ事であらう。然し不幸にして同博士は幾くもなくして他界された爲、同博士の事業は再びみる事を得なくなつたが、やがて東都に於てよく此事業を紹繼し之をして第二期の發展を遂ぐるに至らした人は、乃ち故箭内博士に外ならない。實に故箭内博士は第二期蒙古史研究家の一人であり、東都に於て先人那珂博士のよき後繼者であつた事は何人も疑はぬ所である。

故箭内博士の研究は本書序文に白鳥博士の説かるる如く、又故博士の業績の示す如く、確かに蒙古—元朝の制度に關係した方面に、蒙古滿洲を中心とする歴史地理的方面にが主流をなして居る。後者は故博士が永く滿鐵歴史調査部の一員として研究された爲の必然的な業績でも

云ひ得るが、其制度の方面に特に力を致された事は、全く元朝並に之と關係深き遼金等の北狄朝廷の支那統治の上に、何等か特殊の事情有り、特殊の施設が認め得らるべきに着眼された爲に外ならぬと思ふ。蓋し遼金元の三朝就中元朝は他の北狄諸王朝と異り治世一百年間偏く支那全土を領有せるのみならず、遠く中亞より東歐迄を經略した事は實に史上未曾有の事であつた。而して其中に包有する支那人初め幾多の異種族に對する征服者としての態度は全然他と異なるものがあつた。これが即ち蒙古をして急速に強大ならしめ、又同時に急速に滅亡に瀕せしめた所以である。恐く故箭内博士は此點に早く着目せられ蒙古の制度、組織を研究するに至つたもので、此方面の研究によつて蒙古史の新しき解釋を試みんとされた事は實に爛眼の至り云べきではあるまいか。勿論博士は天壽を全うせずして道山に歸せられた爲に、此方面に於て凡ゆる事項の研究をさるるに至らず、且従つて其論述に遺憾な點がないでもないが、それは事情已むを得ぬ所であり、若し博士にして尙生を享けられたならば、必ず

や其失は十分に補ひ得られた事と思ふ。尙博士の研究法は業績をみて直に知る如く實に堅實を主義として、博引旁搜を努め、文章の結構より字句の使用迄細心の注意を拂ひ寸分の隙もないやり方であつた。故に白鳥博士の言の如く、天馬空を行く奇抜莽放の論は見られない代りに穩健にして正鵠を失せず飽く迄も確實さを以て貫かれた勿論その論證の法が完全であつたか否かは、みる人によつて異見もあり、或一派の研究者からは物足らぬ憾みを懷かるるにせよ、其眞摯な研究的態度に對しては吾人は滿腔の敬意を表するのであつて、今尙、より多く個々の事實の究明を必要とする蒙古史乃至塞外史研究には、かかる態度こそ當を得たものであり、かくてこそ初めて真相の把握に困難なる塞外史に一大光明を齎し得るものであると考へるのである。かかる條件の下に作られた各種の著作の一括上梓されたのが本書に外ならぬ。

さて本書は、巻頭に著者の小照及び傳記を載せてその人となりやを彷彿せしめ、次に著述目錄を掲げて、明治三十五年より大正十四年に至る前後二十五年間の著書論文

四十三篇の目録を記し、加ふるに遺稿目録を附して、如何に故博士が一生を蒙古史研究に委ねられたかを一目瞭然たらしめ、そとに敬虔の念禁じあへぬものがある。次に載せられた白鳥市村兩博士の序文は、名は序文と雖それ自體一個の研究論文として東洋史一般或は蒙古史研究の指針たるもので、亦必讀の文と云ふべきである。而して本篇一千頁は、凡例によつて知る如く、遺稿は凡て採録されず、又既刊著書論文四十三篇の中單行本及び他の學者との共著に係るもの、協同研究の一部をなせるもの、又は他日改訂公表を約されしものは凡て省いて二十篇、及び附録二篇計二十二篇を收めてある。何れも故博士の心血をそがれた珠玉の名篇で、大正三年三月東洋學報に掲載の「兀良哈三衛名稱考」より年次を追うて大正十四年十二月白鳥博士還曆記念東洋史論叢所載の「蒙古詐馬宴と只孫宴」に至る二十篇と「成吉思汗」「元の世祖と唐の太宗」の二人物評論とがその内容をなすのであつて、云はば大正三年より以後の大正年間に於ける博士の論文集に外ならず、最もよく博士の研究の實體を語る

ものである。今其個々の論文の紹介は紙面の許されぬ所であるが、二三、淺學なる吾人の氣付いた所を述べる事を許さるるならば、第二の「成吉思汗の滿洲經略に關する二三の研究」は金末滿洲の事情を探る指針であつて滿洲歴史地理第二卷所載の「東嶺國の疆域」に姉妹篇をなすものである。その中東眞國の名稱に付いて、池内博士は東夏國の名稱を擧げて論争されたが、果して何れを是とすべきか俄かに定め得ないのではあるまいか。第三の「元初史實解疑三則」の中成吉思汗の終焉の地を清水縣附近とされたのは妥當な考であらう。第四・五・六の三篇は一時論争の的となつた虜軍に關係のもの、羽田博士松井學士との論争は尙世人の記憶に新なる所、後鳥山學士も之に關係する一文を出されたが、果して故博士の力説さるる如く解して差支なきやは尙後考を要する事と思はれる。第八の「元朝怯薛考」第九の「元朝社會の三階級」の二篇は故博士の學位論文の主體をなすものと聞く。非常な勞作であるが、吾人は乍失禮、博士の説に承服しかねる所がある。それは元朝の漢人兩人に對する態度に關してであ

つて、吾人は元朝は色目人漢人は稍優遇したれ、南人に對しては例外有り云へ、主義としては徹底的抑壓の態度を以てのぞんだものご考へるのであつて、この點博士の説に直ちに賛成し得ないのを遺憾とする。第十のクリルタイの研究第十五の韃耳朶の研究は蒙古國家構成を知るべき好著であり、且又風俗習慣の研究上よりも看過し得ないものである。之を推し擴めて遼金等の部族に於ける事ご比較する時一層よく這般の事情が明らかになるご思ふ。第十三の韃靼考は蒙古族の種族研究上必讀の文で、延いて北方種族研究の入門ご稱すべきものであらうか。

第十六の「元代の官制ご兵制」に就いて考ふるに、中書が一般行政の府ごなり、尙書が特に財政の府ごなり、門下の立てられなかつたのは博士の説の如く元朝の特徴であるが、然し此事は同時に君主專制の實を語るに外ならずやがて明清に至つては三省共に廢せられ、六部が長官として天子に直屬するに及んで君主專制は完成したのである。然らば此點よりして元史官制の變化は特に注意すべきであるまいかと思ふ。第十八の「元朝牌符考」に就いて

ては近時羽田博士の新研究がなされて居る事を特に附け加へて置きたい。附録に見ゆる二篇は人物評論ごして興味有るものであるが、博士は成吉思汗を少しく辯護され過ぎたる感あり、又世祖は本質的に唐太宗よりは優れる人物ご思惟され得る如く解さるる以上、され位太宗に私淑したかは輕々に論じ得ぬではなからうかごも思ふのである。

以上二三吾人の氣附いた所を記して本篇の紹介に代へたが、固より淺學の見故博士の高説を云々するに非ず、博士の諸論文の價値は愈々高い事を承知され度いご思ふ。而して本書は外篇ごして市村博士の「元朝の實録及び經世大典に就きて」の一文、松井學士の跋文あり、最後に編者の勞作にかゝる「元史研究資料並に參考書目錄」を附せらるるに至つては、更に其勞を多ごするもので、至れり盡せりの親切は末尾の索引ご共に、更に吾人を裨益する所幾何なるを知らぬ有様である。

思ふに此一書は或意味に於て元史研究の縮圖であつて首尾一貫した蒙古史そのものではないにせよ、所載の論

文が多方面に互れるを以て仔細に之をみる時、各方面の研究上の暗示を得る事多く、やがてこれが機縁となつて今後新研究の續出すべきは火を賭るよりも明らかであると思ふ。いささか蕪辭をつらねて本書の紹介に代ふ。願くは江湖の諸士一本を左右に備へられん事を。(刀江書院發行。定價八圓)〔鴛淵〕

● 小川博士 史學地理學論叢
還曆記念

我が京都帝國大學文學部地理學教室並びに理學部地質學礦物學教室の創始者として多年學界に貢獻せられた小川琢治博士は昭和五年己巳、五月二十八日、還曆の壽を迎へられた。因て僚友門下生相集り、頌壽の賀會を開き贈るに銅鑄肖像記念論文集を以てしたが、論文集の編せらるるに當り、稿を屬する者、學界の權威を網羅する實に五十有五人、科は文・理を分ち、蒐録部を殊にし各々巨製をなし、今や上梓發刊の運びに至る。

本書は即ち文科系統の論文二十六篇を蒐集したもので四六倍判一千六十四頁の巨冊、卷頭に小川博士還曆の照影を掲げ、次に博士の著作表(單行本、論文、歐文著述

目錄)を載せてゐる。

各論文の題目、筆者及び其内容を簡單に紹介すれば、「支那古代の稻米稻作考」(岡崎文夫)支那古代に於ける稻米の用途として飯用、薦薪の儀用、飲用(酒)、羞食用等を挙げ、其稻作地域を論じ、西晋・北魏に於ける稻作の問題に及べるもの。「人文傳播に關する一考察」(喜田貞吉博士)過去に於ける文化傳播の遲延は必しも僻陬の地交通不便等の地理的原因のみに依り解釋す可きに非ず、古俗保存等の特殊事情にも起因すること京都、奥羽等の例を引いて立証してゐる。「古文尙書に關する一二の小研究」(神田喜一郎)經典釋文の序録の解釋、宋の辟季宣が書古文訓に用ひた隸古定尙書の眞偽に關する考察。

「讃岐の人口稠密なる原因の一部に就て」(寺田貞次)交通路の關係より文化の發達、殊に佛教の弘通より民衆の指導的立場に在つた高僧の輩出、又地形の關係上より古來灌漑用溜池の發達等を挙げ、此等地人相關の理法より今日の人口稠密を將來せるものなりと結んでゐる。「公羊疏作者時代考」(狩野直喜博士)十三經注疏の中で、撰者